邪馬台国はどこにあったか *
—「魏志倭人伝」の行程を素直に読むとこうなる—

— Examining "Yamataikoku" according to the field visit descried in "Gishiwajinden"—

吉本　彰 **
by Akira Yoshimoto

まず最初に「倭人伝」に記載されたソウル～釜山間、釜山～対馬間、対馬～壱岐間および壱岐～唐津間の距離と実際の水路の長さを比較した。その結果、「倭人伝」で用いられている一里の長さは60～110 mの間にあると推定された。

つぎに、この尺度を用いて「倭人伝」を読み進んでゆくと、伊都国は現在の佐賀市付近にあることが判明した。

伊都国から先は舟旅になるので、この尺度が使えない。「倭人伝」には伊都国から10日の舟旅で邪馬台国に達するとある。紀貫之の「土佐日記」から当時の舟が1日に進む距離を割り出すと7.3 kmである。この値を用いて邪馬台国の位置を求めると、熊本市付近となる。

1　まえがき

中国の史書『魏志』「倭人伝」(以下、「倭人伝」と略す)に三世紀における倭国のことが記載されている。当時の倭国は卑弥呼という女王によって治められていたことが、これによって明らかになったが、女王のいた邪馬台国の位置に関しては長年、論争が繰り広げられている。大きく分けると，邪馬台国は畿内にあったとする説と九州にあったとする説の二つになるが，両者はお互いに譲らない。同じ九州説であっても、具体的な位置に関しては、いろんな主張がなされている。万人の納得しうる結論が出てこないのは研究のための決め手を欠くためで、専門外の筆者が手を出せる問題ではないと考えていた。ところが、たまたま読んだ一冊の本によって気持ちが変わり、柄にもなく邪馬台国の位置に取り組んでみようという気になった。

その一冊の本というのは茂在寅男(敬称略，以下同じ)著の「古代日本の航海術」(文献1)である。茂在は東京商船大学教授の職にあった人で、この本の中で、ソウルから釜山までの島々の間を縫いながら航海した場合の水路の長さに基づいて「倭人伝」で用いられた「1里の長さ」を算定している。さらに自らの体験と文献から「1日あたりの陸行(徒歩による移動)距離」と「1日あたりの水行(舟による移動)距離」に触れている。これらの数値を導き出すに当って茂在が用いた方法には科学性があり、その上筆者にも使いこなすことが可能と思われたので，この方法を用いて邪馬台国の位置に挑戦してみることにした。ここに述べるのは、そのアプローチの経過と得た結論である。

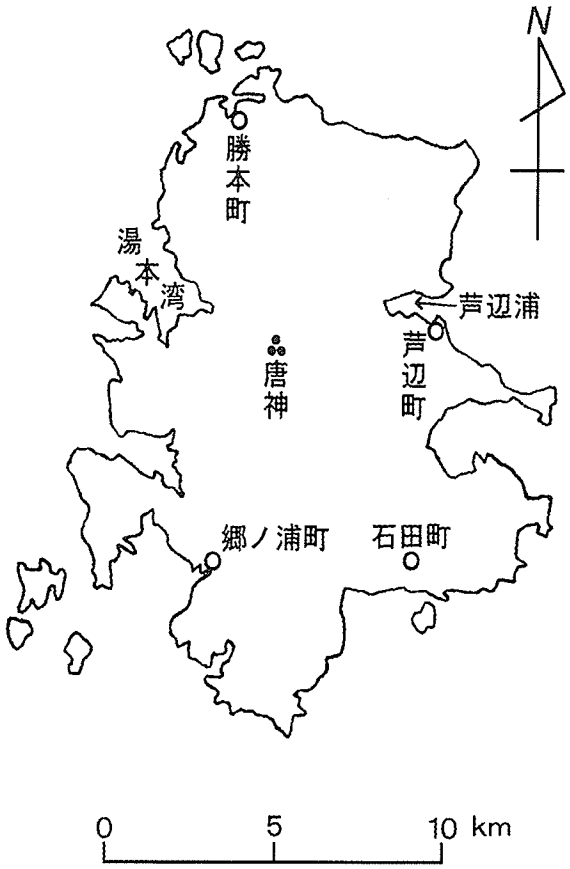
2　「倭人伝」における1里の長さ

「倭人伝」に「郡より倭に至るには、海岸にしたがって水行し、韓国をへて、あるいは南し、あるいは東し、その北岸の狗邪韓国に至る。七千余里」とある。郡というのは当時の中国が朝鮮半島に設置していた帯方郡の安岳付近のことで、現在のソウル付近にあたる。狗邪韓国というのは中国側の呼び方で、朝鮮半島の南端に存在した加羅（あるいは任那）の地がこれに相当し、現在の釜山付近と考えてよい。したがって、この記述を言い換えると、ソウル付近の海岸から釜山までが7000余里ということである。ソウルの外港である仁川を出発し島々の間を通りながら釜山へ行くものとして、水路の最短距離を求めると大体650ｋｍである（文献1、140頁)。7000余里を7000里として計算すると1里は93 m となる。茂在はこの結果から「倭人伝」で用いられている1里の長さは93 m であると結論しているが、本報文ではこの手法を釜山から北九州までの区間にも及ぼし、これらの結果を総合して1里の長さを求めてみた。

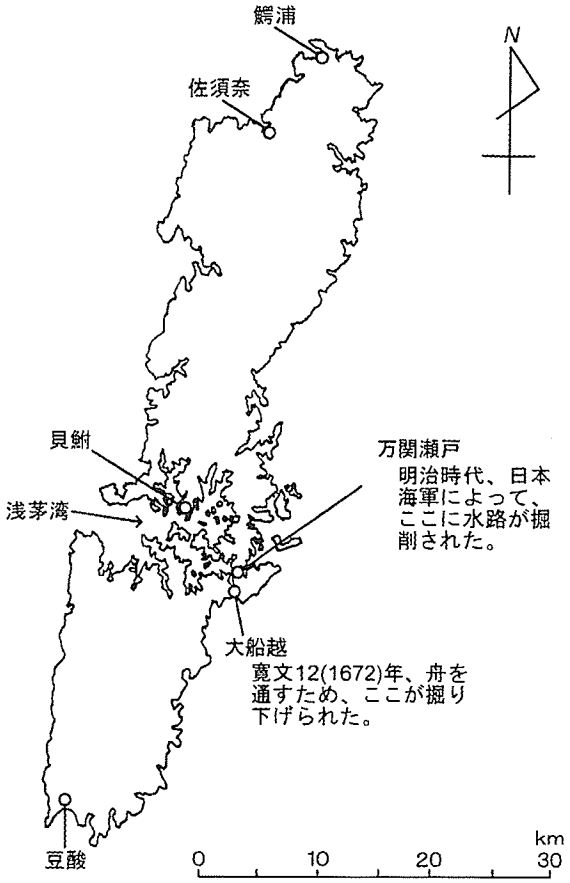
「倭人伝」には前述の記述に続いて、釜山から「一海を渡ること千余里にして対海国に至る」とある。対海国というのは対馬に対する中国側の呼び方である。さらに「倭人伝」には、そこから南に「一海を渡ること千余里にして一支国に至る」とある。一支国というのは壱岐のことである。なお「倭人伝」には「また一海を渡ること千余里にして末慮国に至る」とある。末慮国は北九州にある国である。

説明の便宜上、釜山～対馬間および対馬～壱岐間の距離

*keyword : 邪馬台国，魏志倭人伝，土佐日記
**　　工博　山口大学　名誉教授
（〒615-0925 京都市右京区梅津大縄場町6の6 嵐山ロイヤルハイツ4-206)



図－1　壱岐の地名（作成：吉本）



図－2　対馬の地名（作成：吉本）

は後まわしにして、まず壱岐～北九州間の距離を求める。

壱岐の東岸に原の辻遺跡（芦辺町）という弥生時代の大きな集落の跡がある（文献2、325-326頁）。芦辺浦の舟着き場の跡も発掘されており、ここが北九州あるいは対馬との重要な連絡拠点であったと考えられている。

末慮国というのは現在の佐賀県松浦郡とされており、一般には唐津市付近が上陸地点とみなされている。地形からいって、確かにここは有力な候補地のひとつである。しかし末慮国が松浦郡であるという通説を、そのまま鵜呑みにしていいものだろうか。どうも語呂合わせ臭いのである。筆者としては納得し難い面があったので、独自の観点から検討を加えてみた。この場合の上陸地点の条件として二つのことが考えられる。一つは舟を着けるのに適していること。この外に、東南方向への交通が可能なことが必要である。3でもう一度述べることになるが、「倭人伝」に末慮国から東南へ500里の地点に伊都国がある、という記述がある。すでに述べたように、「倭人伝」には釜山～対馬間、対馬～壱岐間、さらに壱岐～北九州間が、いずれも1,000里と記されている。500里というのはその半分であるから、上陸地点は東南方向にかなり開けた地形のところでなければならない。地図をひろげて、これらの二つの条件を満たす地点を探すと唐津市のほかに福岡市がある。壱岐から福岡市までの距離は、壱岐と唐津市間のそれとほとんど同じである。「倭人伝」に壱岐からの方向を書いてないので福岡市であっても構わないことになる。ところが、上陸地点を福岡市とみなすと「倭人伝」のその後の記述が九州の実際の地形と合致しない。この意味で福岡市は対象から外れる。このことは4で後述する。

九州の上陸地点が通説通り唐津市付近と決まったので、つぎに壱岐から唐津市までの実際の距離を地図（国土地理院、20万分の1）の上で調べてみた。芦辺浦～唐津市間を一気に漕ぎ渡るのは肉体的に大変な仕事であるから、途中に立ち寄れる所があれば、これを利用して夜は陸地で眠るようにしたはずである。茂在の東京高等商船学校時代の経験によれば、1日に航行できる距離は20～25 kmである（文献1、147頁）。このことを考慮して壱岐の石田町と東松浦半島北端の呼子町の二カ所に立ち寄るものとすると、芦辺浦～唐津市間の距離はほぼ60 kmである。余里を無視すると、この場合、「倭人伝」における1里の長さは60 m となる。

壱岐には原の辻遺跡の外に、もう一つ唐神遺跡という弥生時代の大きな集落がある。この遺跡は壱岐島の西北にある湯本湾の東方約2 km の地点にある（図－1）。この遺跡の存在を考えると、対馬あるいは唐津市から湯本湾に出入りする舟もあったであろう。湯本湾から同島の郷の浦、前記の呼子町の二カ所経由で唐津市まで約68 km である。余里を無視すると、この場合の1里は68 mとなる。

対馬は南北に長い島であるから拠点をどこにとるかによって釜山までの距離あるいは壱岐までの距離がかなり違ってくるが、厄介なことに弥生時代の拠点がはっきりしない。対馬の地図をひろげると、島の中央部に浅茅湾が西側から大きく入りこんでいる（図－２）。舟泊まりには格好の地形で、古代、朝鮮と九州の間を往来した舟は、湾内のどこかに一時立ち寄ったと考えるのはごく自然のことといえる。その地点が豊玉町にあったとしておこう。豊玉町の貝鮒（古代の港）から対馬南部の豆酸および壱岐の勝本港経由で、壱岐の芦辺浦に達するものとすると、その距離は約110 km となる。したがって、この場合の１里の長さは110 mとなる。

茂在によると、釜山から豊玉町までの距離は約100 kmである。（文献1、140頁）。これから１里の長さを求めると100 m という勘定になる。浅茅湾は湾そのものが大きいだけでなく海岸線の出入りも大きい。ために、単に豊玉町というだけではその位置がはっきりしないうらみがある。しかし、このことは、のちに述べるように、本論文の結論に影響しないので、ここでは、その位置についての詮索をしないでおく。

壱岐と唐津市の間には島が散在しているし、陸地沿いに進む場合もあるので、昼間だけ力漕して夜は陸地で休むこともできる。しかし釜山と対馬の間あるいは対馬と壱岐の間には、中継ぎになる島がない。一度、大海に乗り出したら、一気に漕ぎ渡らねばならない。交替で睡眠をとりながら、最も近くにある停泊可能な地点を目指したであろう。大変な労働であるから、その地点に辿り着けば、そこが目的とする拠点でなくても一海を渡り終えたという気分になるかもしれない。

この場合を対象にして釜山と対馬北部の鰐浦（釜山にもっとも近い港）あるいは佐須奈（対馬西北部の良港）との距離を求めると約60km。また対馬南端の停泊可能地点を豆酸とみなし、ここと壱岐北端の勝本港との距離を求めると約60 km弱。豆酸と壱岐の湯本湾との距離も約60 kmである。すなわち、釜山～対馬間および対馬～壱岐間の最短距離から求めた１里の長さは60 mで、壱岐の芦辺浦と唐津市の距離から求めた長さと同じである。

これまで検討してきたことを総合して、つぎのようにいえる。「倭人伝」で用いられている１里の長さは60～110 mの範囲内にある。

先に述べておいたように、釜山から豊玉町までの距離が約100 kmという茂在の数値には、豊玉町の位置が明示されていないという欠点があった。しかし100 kmから算出した１里の長さは100 m であるから、「倭人伝」の１里が60～110 mという上述の結論には何らの影響もおよぼさない。すなわち、豊玉町の位置に多少の曖昧さがあったことは、この場合、気にする必要はないのである。

もう一つ付け加えておく。上に掲げた60～110 m という値は「余里」を無視して導き出したものである。「倭人伝」を読んだ感じでは「余」は「約」という意味で使われているように思えるが、そういう使い方があるのかどうか、筆者は知らない。一般の用法通りに「あまり」という意味に使われているのであれば、１里の長さは、ここに掲げた値より若干小さくなるが、幸いにして、１里の長さが少々小さくなっても、本報文の結果は同じになる。このことは、１里の長さを若干小さく想定して本報文と同じ方法でアプローチを試みると、はっきりする。

3　末慮国以後の行程の読み方

「倭人伝」では末慮国（唐津市付近）に上陸してからの記述がつぎのようになっている。

「東南に陸行すること五百里にして伊都国に到る」。さらに「東南して奴国に至る。百里」、「東行して不弥国に至る。百里」、「南して投馬国に至る。水行二十日」、「南して邪馬台国に至る。水行十日、陸行一月」とつづく。

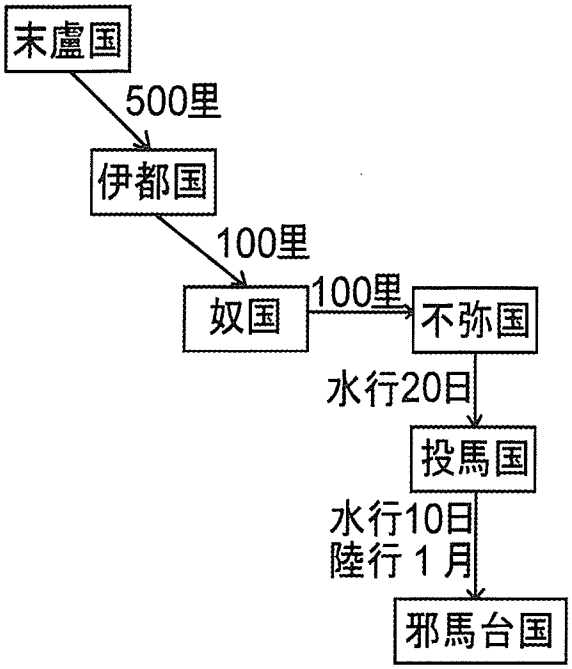
この記述を縦につないでゆくと図－３のようになる。かつては、このつなぎ方が支配的であった。この場合、不弥国から計30日の舟旅と１カ月の徒歩旅行とで、ようやく邪馬台国に達することになる。常識的に考えて邪馬台国の位置は九州からはずれてしまう。

これではまずいので、九州説を唱える人たちは旅行の日数は又聞きだから信用できないとか、単に遠いということを表しているに過ぎないとした。畿内説の人たちは進行方向を間違って記述したとみなして、南を東に変えた。これらの操作は自説に都合のよいように操作したもので、いずれも学問的に許されることではない。

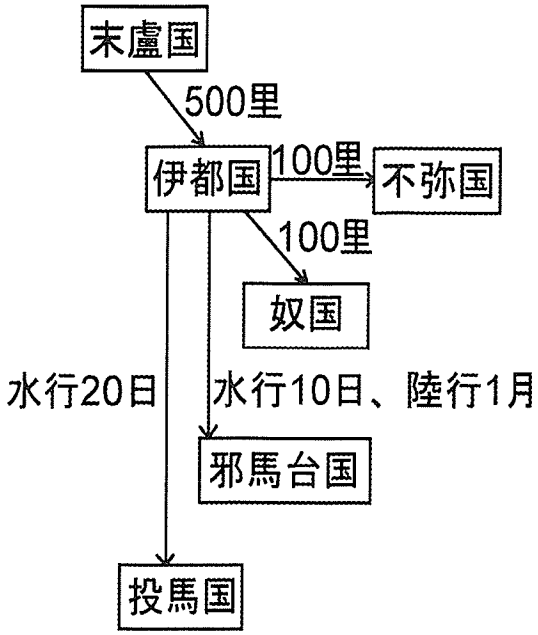
榎一雄は「倭人伝」における行程の書き方が、伊都国の前と後とで違っていることに気がついた。すなわち、伊都国に着くまでは方位のつぎに距離を示し、最後に到着する地名をあげている。しかし伊都国から後の記事は、方位のつぎに地名を掲げ、最後に距離を記している。これはなぜだろうか。榎は、単なる文章の綾ではなさそうだと考え、『新唐書』の「地理志」の文章を参考にして、伊都国から後の記事は伊都国を中心に、奴国、不弥国、投馬国および邪馬台国への方向と距離が書かれていると考えた（文献3、49-50頁）。榎説によると「倭人伝」に記載された行程は図－４のようになる。

牧健二は、「倭人伝」は『前漢書』の書例にならって陳寿が書いたものであるから『前漢書』を参照して解釈すべきだとし、榎説を支持している。牧によると、伊都国より後の方位、地名、距離の記載様式は『前漢書』の「西域伝」に載せられた53の国の記述に見られるという（文献3、79-80頁）。

図－４のつなぎ方は、榎や牧のような考え方をしな



図－３　末盧国以後の行程（縦継ぎ）（作成：吉本）



図－４　末盧国以後の行程（放射状）（作成：吉本）

くても、「倭人伝」を素直に読めば自然にでてくる様式である。このことを説明しよう。

「倭人伝」における狗邪韓国からのちの行程の記述を列挙すると、つぎのようである。

① 始めて一海を渡ること千余里にして対海国に至る。
② また南に一海を渡ること千余里にして一支国に至る。
③ また一海を渡ること千余里にして末慮国に至る。
④ 東南に陸行すること五百里にして伊都国に到る。
⑤ 東南して奴国に至る。百里。
⑥ 東行して不弥国に至る。百里。
⑦ 南して投馬国に至る。水行二十日。
⑧ 南して邪馬台国に至る。水行十日、陸行一月。

初めの三つ、すなわち①～③には「はじめて」とか「また」という副詞が頭についているから、この部分は縦継ぎにしなければならない。④には副詞がついてないが、上陸して初めての行程だから、当然、それ以前の記述に縦につながる。問題は⑤以下であるが、これらを縦継ぎにするためには、それぞれの頭に「また」とか「さらに」という副詞がついていなければならない。これが省かれているのであるから、⑤以下の記述は伊都国から奴国、不弥国、投馬国および邪馬台国への方向と距離が独立して記述されているとみなし、図－４のようにつなぐのが自然である。

ここで⑧の「水行十日、陸行一月」の記述に触れておきたい。これも紛らわしい表現で、邪馬台国へゆくには水行10日ののち、さらに1カ月の陸行が必要だというふうに受け取られやすい。しかし同じ「倭人伝」の記述であるから、これまでの論法を適用して読むべきである。すなわち、「水行十日」と「陸行一月」の間につなぎの言葉がないから「水行なら10日、陸行なら1カ月」という意味になる。

4　伊都国の位置

つぎに、末盧国から「東南に陸行すること五百里にして伊都国に到る」について検討してみよう。

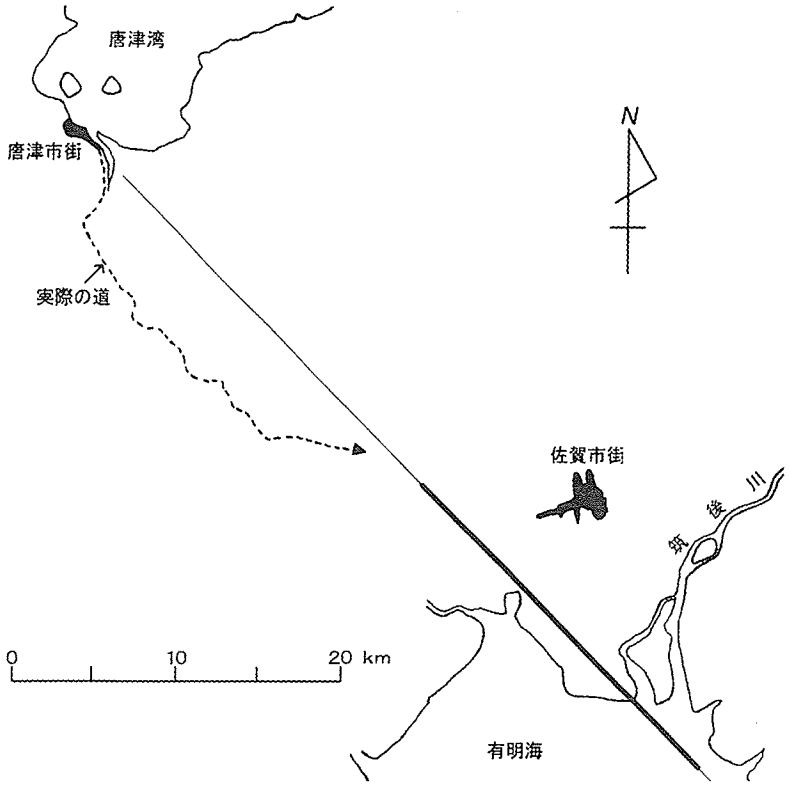
末盧国における上陸地点が唐津市付近だとみなして、唐津市から東南方向に線を引くと図－５の直線のようになる。太い部分は１里の長さを60～110ｍとした場合の500里の範囲である。伊都国はこの太線のどこかに位置するはずである。点線は地形を参考にしながら当時の人々が歩んだ道を推定したもの。地形図を見ると、上陸地点から東南の方向に向かっていた一筋の道が浮かび上がってくる。

先にのべたように、「倭人伝」には投馬国や邪馬台国は伊都国から南へ、それぞれ水行20日あるいは水行10日と記されている。この記述から、伊都国は南に向かっての舟出が可能な地点にあったことがわかる。

伊都国はこれら二つの条件から佐賀市付近にあったと結論できる。

「倭人伝」によると、伊都国の東、100里の地点に不弥国があり、東南、100里の地点に奴国があった。伊都国の位置が佐賀市付近であるから、不弥国は最近注目を集めている吉野ヶ里の付近、奴国は徐福が上陸したという伝承をもつ諸富町の付近になる。これらは邪馬台国の位置に直接の関係は無いが、参考として述べておく。

２において、北九州の地形からは福岡市付近も上陸地点の候補であるが、「倭人伝」の記述からこの地は対象外になると述べておいた。このことを具体的に説明しよう。



図－5　伊都国の位置（太い実線の範囲にある）（作成：吉本）

「倭人伝」の記述によると、伊都国は南に向かって舟出が可能な土地でなければならない。ところが福岡市付近に上陸したとすると、伊都国は内陸部に存在することになり、この条件が満たされない。したがって福岡市付近は、「倭人伝」で上陸地点としている末盧国ではありえない。

5　水行1日の距離

「倭人伝」では伊都国から先の距離を里ではなく、水行あるいは陸行の日数で表している。

茂在は水行1日の距離を知るための参考資料として紀貫之の土佐日記をとりあげた（文献1、146頁）。貫之は934(承平4)年12月27日に土佐の大津（現在、高知市内）を出て翌年2月6日に難波の淀川尻に着いているが、この間39日を要している。両地点間の距離は約285kmであるから、これを39で割ると1日あたり7.3kmである。

前に述べたように茂在は自らの経験をもとに、1日に航行できる最大距離は20～25kmだとしている。7.3kmという値は、これに比べて小さすぎると感じる人が多いことであろう。土佐日記によると、使用した舟は帆を備えていたが、風が吹いたり雨が降ったりして実際に航海できたのは12日に過ぎず、そのうち帆走できたのはたったの1日だったという。285kmを12で割ると、1日に24kmを航行したことになる。この値は茂在の経験値と大体一致している。連続航行ができれば舟の旅もかなりの速度を期待できるのだが、実際には風や雨の日には舟を出さないし、舟の修繕やその他の支障のため出航できないことが多く、全体を均すと、水行1日あたり7.3kmという小さな値になってしまうのである。

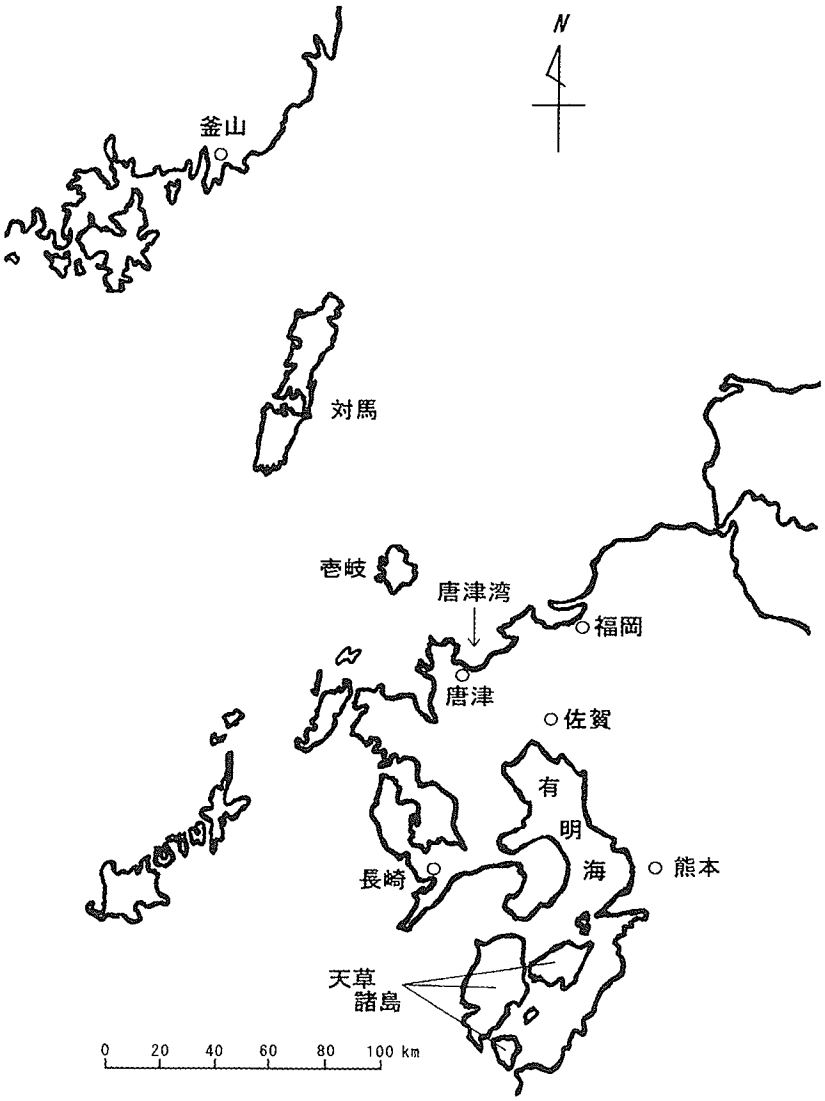
6　邪馬台国の位置

「倭人伝」によると、伊都国から南へ水行10日で邪馬台国に達するという。佐賀市付近を出発して有明海を南へ、東の陸地沿いに1日当たり7.3kmの速度で進んだとすると、10日目には熊本市付近に達する。(図－6参照)

「倭人伝」には、各国の戸数がつぎのように記されている。

対海国	1,000戸	30,000戸
一支国	3,000戸	
末盧国	4,000戸	
伊都国	1,000戸	
奴　国	20,000戸	
不弥国	1,000戸	
投馬国	50,000戸	
邪馬台国	70,000戸	

「倭人伝」に「女王国より以北には、特に『一大率』を置き」とある。松本清張によれば、「一大率」というのは魏の命令をうけ帯方郡より派遣された軍政官であるという。「一大率」は女王国より北を統治すると同時に、女王国を監督していたのである。すなわち、女王国より北は女王国のうちの特別地区で、女王国の政治の及ばない区域



図－6　対馬、壱岐および有明海周辺（作成：吉本）

であった。(文献3、208項)。この特別地区の国々（対海国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、および不弥国）の戸数を合計すると30,000戸となる。この戸数と投馬国、邪馬台国のそれとを比較すると3、5、7の割合になっている。このことから白鳥庫吉は、「倭人伝」記載の戸数は中国の陰陽五行説に基づいて作られたもので、その数値そのものは信用できないと考えた（文献3、94頁)。しかし、9でのべるように「倭人伝」の記述は十分信頼に値するものであるから、これらの数値がでたらめなものとは思えない。白鳥の指摘するような操作が多少あったとしても、それは実態が大きく損なわれない範囲で行われたであろう。

「倭人伝」に記載された戸数からみると、邪馬台国は決して小さな国ではない。これだけの戸数を包含するためには広々とした土地が必要であるが、熊本市付近には平野が開けていて、この条件が満たされている。

7　陸行の日数

「倭人伝」では伊都国から邪馬台国までの距離を表すのに「里」をもってせずに、「水行ならば十日、陸行ならば一月」という表現を用いている。これから、伊都国から邪馬台国へは陸地を徒歩でゆくことも可能だが、むしろ舟で海上を移動するほうが便利だったということが推察できる。このこと自体は納得できるとしても、陸の旅では海の旅の3倍もの日数がかかるということに抵抗を感じる人も多いであろう。しかしこのことは、当時の陸上の様子を考えれば不可解なことではない。

森浩一によると、有明海は弥生時代の貝塚の多いところだという。吉野ヶ里遺跡の海岸寄りのところに、カキ、アサリ、ハマグリなどの殻を出す詫田遺跡をはじめ、有名な貝塚が点々とある（文献4、145頁)。現在でも佐賀市はクリークのまち、柳川市は水郷のまちである。現在のような広大な佐賀平野は「倭人伝」の時代には存在しなかった。そのため、目標が南にあっても、徒歩の場合は出発点の佐賀市付近で大きく迂回することになった。これも陸上の移動を不利にした理由の一つである。

その後のルートは不明であるが、移動が容易でなかったことは想像に難くない。海上では直線的に、しかも水平に進むことができるが、陸上ではそういうわけにはいか

ない。道は曲がっている上に、上がり下がりが多い。それに道の幅も狭く、表面の状態も悪い。道そのものに草木が繁茂していることもあるし、橋のないことが多い。1日に前進できる距離は、現代人の感覚では信じられないぐらいに小さなものだったのである。

8　投馬国の位置

「倭人伝」によると、伊都国を出発して南へ水行20日で投馬国に達するという。邪馬台国の場合は水行のほかに陸行の日数を併記してあったが、投馬国の場合は水行だけである。ということは、投馬国へは徒歩ではいけない、舟が唯一の交通機関だということであろう。具体的には島であろう。「倭人伝」に記された戸数はかなり大きい値であるから、熊本市（邪馬台国）より南にあって、しかも大きい島が候補になる。天草が有力な候補地として浮かんでくる。（図－6参照）

9　「倭人伝」の信頼性

ここで「倭人伝」の信頼性に触れておきたい。「倭人伝」では伊都国に関する個所の最後のところに「郡使往来、常に駐る所」という記述がある。帯方郡からの使者が伊都国に常駐していたのであるから、伊都国に至る行程はもとより、伊都国の周辺の国々への行程も、かなりの精度で把握していたはずである。

「倭人伝」に「女王国より以北は、その戸数と道里の略載を得べきも、其の余の旁国は遠絶にして詳を得べからず」とある。この表現からみて執筆者の陳寿が、「倭人伝」の記述に正確を期していたことがうかがえる。

また、これまでの本報文の考察で明らかになったように、「倭人伝」の記述は九州の地形にぴったりあてはまる。これは、その記事の信頼性の高さを示す何よりの証拠である。

従来、「倭人伝」の行程は正確でないとみられがちであったが、それは読み方の不適切によって生じた誤解というべきである。例を挙げよう。

「倭人伝」に記された国について、その位置を論じた論文はたくさんある。それらの結論のうち、専門家の間で有力視されているものに、つぎのようなものがある。

伊都国 ——→ 筑前国怡土郡（福岡県糸島郡）
奴　国 ——→ 那の津（福岡市付近）
不弥国 ——→ 筑前国糟屋郡の宇瀰
（福岡県粕屋郡宇美町付近）
邪馬台国——→ 筑後国山門郡（福岡県山門郡）

なぜこのように考えたかというと、発音が似ているからである。はっきり言えば語呂合わせである。このような方法で正しい結論がえられるという保障は、どこにもない。たとえば伊都国である。「倭人伝」によると唐津市の東南になければならないが、筑前国怡土郡と考えると唐津市の東北になってしまう。帯方郡からの使者は実際に伊都国の地を踏んでいるのである。唐津市からの方角を誤ることは考えられない。

10　まとめ

茂在は「倭人伝」に記されたソウルから釜山までの里数と実際の水路の長さとから、「倭人伝」で用いられている1里の長さを算出した。筆者はこの手法を釜山～対馬間、対馬～壱岐間、さらに壱岐～唐津間にも適用して、「倭人伝」における1里は60～110 mの間にあると推定した。この尺度を用いて「倭人伝」を読んだ結果、伊都国は現在の佐賀市付近にあり、邪馬台国は現在の熊本市付近に存在したであろう、との結論に達した。筆者は茂在の手法を高く評価しているのであるが、邪馬台国関係の古代史家の中でこれに注目した人が見あたらない。なぜだろうか。筆者はこのことを不思議に思っていたが、古田武彦の著書（文献5、6）を読み、ようやくその疑問が解けた。この経緯には本論文の結論を裏側から補強する効果もあるので、最後にその概要を記して本報文をしめくくっておく。

一般に古代中国の1里は435 mとみなされているが、古田によると、中国の「里単位」には長里（1里は約435 m、ただし今日では1里は約500 m）と短里（1里は約77 m）があり、魏の時代には短里が用いられていた。60～110 mは古田の主張する短里に該当する。

古田によると、研究者達が「倭人伝」の里数を無視するのは次の理由によるという（文献6、179-181頁）。「倭人伝」の研究の初期から、魏時代の1里の長さは前漢時代のそれと同じく約435 mと考えられてきた。白鳥庫吉は正確な地図・海図などから航路の長さを測り、これと1里を435 mとして算出した「倭人伝」記載の距離とを比較した。その結果、「倭人伝」の里数には誇張があり、約5倍になっているとの結論に達した。白鳥は中国の使者が恩賞目当てに大嘘を書いたのだと解釈した。内藤湖南もこれを承認し、「倭人伝」に記載された里数は論証に使わないほうが賢明であるとして、これを削除してしまった。このことがあとあとまで影響した。研究者の頭の中には「倭人伝」の里数は信用できないということが強力に焼きついてしまったため、茂在の手法はアプローチの方法として論外のものと映ったのであろう。

謝辞

本報文の発表に際して、京都大学名誉教授　天野光三氏から多大なお力添えをいただきました。記して感謝の意を表します。

引用文献
1） 茂在寅男：古代日本の航海術，小学館創造選書，1979.
2） 森　浩一：考古学と古代日本，中央公論社，1994.
3） 松本清張：古代史疑，中央公論社，1959.
4） 網野善彦，森　浩一：馬・船・常民，河合出版，1992.
5） 古田武彦：よみがえる卑弥呼，朝日文庫，1992.
6） 古田武彦：倭人伝を徹底して読む，朝日文庫，1992.

付記1

「倭人伝」に記載された邪馬台国への行程は、本文で述べてきた通りであるが、「倭人伝」では別の個所に「その道里を計ると、会稽郡の東冶県の東にあたる」という記述がある。東冶県というのは福建省の福州市付近であるから、「倭人伝」の著者の陳寿は、邪馬台国は熊本市の遥か南（九州そのものよりも南）にあると推定していることになる。

「倭人伝」に、邪馬台国は南の狗奴国と前々から不和で交戦している旨の記述がある。戦闘が行われている以上、両国は陸続きのはずであり、邪馬台国が九州より南方の島にあったとは考え難い。

陳寿がなぜ邪馬台国の位置を実際より遥か南に想定したか、はっきりしたことは分からないが、ひょっとしたら「邪馬台国は伊都国から水行十日の位置にある」ということが関係しているかもしれない。帯方郡から末盧国までの舟は大海を渡る必要上、大型で頑丈につくられており、漕手も多く、速度も大きい。それに比べると有明海で使用されていた舟は信じられないぐらい貧弱である。1日あたりの速度が僅か7.3km　程度だったということは、陳寿にとって想像外のことだったのではあるまいか。

付記2

『後漢書』の「倭伝」に「女王国より東、海を渡ること千余里にして拘奴国に至る。皆倭種なりと雖も女王に属せず」という記述がある。「倭人伝」よりのちの時代に書かれたものだが、邪馬台国が起点になっているので、その具体的内容に触れておこう。

前に述べたように魏の時代には短里が用いられた。西晋はこれを受け継いだが、『後漢書』の書かれた時代になると元へ戻って長里が用いられている。したがって「後漢書」における1,000里は435kmとなる。女王国（熊本市付近）の東方の海岸を舟出して、東へこれだけの距離を進むと、ほぼ畿内に達する。すなわち『後漢書』の記述は、邪馬台国とは別に、畿内の地にも倭人の有力な勢力が住みついていたことを表している。

付記3

本報文の骨組が一応でき上がったのは1992(平成4)年6月である。この当時、対馬における弥生時代の遺跡は見付かっていなかった。ところが2000(平成12)年10月28日の朝日新聞によると、峰町の三根遺跡の山辺区でそれが発見されたという。三根湾は浅茅湾の北15km　ほどのところにある。

本報文では浅茅湾の豊玉に拠点があったと仮定して考察を進めてきたが、対馬の弥生時代の状態が追々鮮明になってくると他に拠点を求めるのが適当になるかもしれない。その場合には1里を60～110 mとする数値にごく僅かの変化が生ずる可能性がある。110 mというのは浅茅湾の貝鮒から壱岐の芦辺浦までの距離から算出されたものであるから、この値が多少変化するかもしれない。60 m については芦辺浦と唐津市間の距離、さらに対馬と壱岐との最短距離および釜山と対馬の最短距離にもとづいているので、これは変化しない。

1里を60～110 mとする数値にごく僅かの変化があった場合でも、本報文で明らかにした伊都国の位置に変化はなく、したがって最終結論の邪馬台国の位置にも変動が生じない。